

“会社のデータを
誰もが使えるデータ
に変える”

データ カタログ という 魔法

Pttrner, Inc.

深野嗣

Hide Fukano

はじめに

こんにちは。株式会社パタンナー代表の深野嗣（ふかの・ひで）と申します。

本書は、私がこれまでに携わってきた**データ分析、BI（ダッシュボード）およびAIの設計・開発、データ基盤の構築、分析、組織作り、そしてデータ人材の育成・研修**といった、企業におけるデータ活用全般の実務経験をもとに、「データを"使える資産"へと進化させるための方法」を解説した一冊です。私がこのテーマを選んだ理由は、前述した「**データを活用できるデータ資産に変えることこそが、これからの日本企業にとって最も重要である**」と確信しているからです。

そして、それを現実のものにする鍵となるのが——データカタログ（データインテリジェンス）と呼ばれるソフトウェアなのです。

『データ資産？ データカタログ？ 何それ、オイシイの？』
そう思ったあなたのための一冊が、この『データカタログという魔法』です。

本書は、おそらく日本で初めて、データカタログについて網羅的に解説した一冊となるはずです。

それほどまでに、国内ではデータカタログの存在や重要性がまだ十分に認知されていないのが現状だからです。

対象読者

ここまでの説明を読んで『本書はエンジニア向けの書籍なのでは』と思われた方もいらっしゃるかもしれません。

しかし本書は、そうした技術職に限らず、DX推進室などの事業部門で働く方や、日常的にデータや数値に触れる経営企画・マーケティング・営業職の方々にも、ぜひ手に取っていただきたい一冊です。

本書が少しでもあなたのお役に立ったのなら、同じように悩みながら現場で戦うあなたの上司にも、この本をそっと渡してみてください。

本書は『データドリブン経営を実現したいが、技術や製品、あるいはデータの歴史をキャッチアップする時間がない』と感じている経営層の方々にも向けて執筆しました。

『新しいことは若手に任せ、自分はもう諦めた……』そんなふうに『**今さら聞けない**』と感じている方にも、本書が新た

な気づきを与え、もう一度一步を踏み出すきっかけになることを願っています。

逆に言えば、本書は、データ活用の最前線で活躍する技術者を、さらに専門的な高みへ導くための技術書ではありません。むしろ、そうした専門家の取り組みや知見が、より多くの人に伝わり、組織全体の力になるように——あなたがもっと遠くへ進むための「共通言語」を築けることを目指して、本書は書かれています。

すべての社員が データを活用する時代に必要なもの

本書を手にとってくださったあなたは、これまでに数多くの「データ」や「AI」に関する書籍を読み、熱心に学ばれてきた方かもしれません。

そこで、一つ質問させてください。

そうした本を読んだあと、それらの知識を実務に活かしているでしょうか？

私思うに、活かすことが難しい理由の一つは、「実務で使いやすい本が少ない」という点にあると考えています。

現在、データ活用に関する書籍は、大きく2つのタイプに分けられます。

一つは、**専門的な技術者向けの実務書**です。内容は緻密で専門性も高いのですが、技術的な知識がない方にとってはハードルが高く、業務に応用するには多くの壁があります。

もう一方は、**データの理論や考え方に焦点を当てた書籍**です。概念的な理解には役立ちますが、「では実際にどう行動すべきか」「業務でどう使えばいいのか」といった具体的なイメージを描くのは難しい場合があります。

今や、ビジネス部門の人たちも、当たり前のようにデータ活用する時代になりました。

その一方で、データとビジネスの間をつなぐ"橋渡し役"として、実務に本当に役立つ本は、意外と少ないのではないのでしょうか。

私は、データとビジネスの橋渡しこそが、日本企業のデータ活用を本質的に前進させる鍵だと考えています。職種の壁を越えて、共通の言語で語り合い、協力し合える組織は、今以上の成果を必ず生み出せるはず。

……そんな思いが、この本の出発点になりました。

本書のコンセプト

そういうわけで、本書では次の3つのことを大切にしてい

ます。

1 面白く読めて、勇気を得られること

仕事も生活も、面白くて楽しいものであるべきだと私は思っています。そうでなければ、続けること自体がつまらなくなってしまいます。

けれど、最近は勇気もらえる場所や機会があまり多くありません。危機感ばかりを煽るような本では、読む人が前向きになれないと感じています。

だからこそ、私は**本書を通じてあなたに勇気を届けることを何よりも大切にしています。**

『私にもできるかも!』『やってみたい!』と感じてもらえたなら、それだけでこの本を書いた意味があります。

2 啓発で終わらず、知識を得られること

本書では、技術的な専門用語も、できるだけやさしい言葉で説明するよう心がけて書きました。

専門的な内容は、日々の業務で起こりうる具体的なシーンをもとに、物語形式で紹介しています。理論とユースケースの両方の側面から解説することで、単なる気づきで終わらず、明日からすぐにデータカタログを活用できる構成を目指しました。

3 異なる職種の価値観にふれること

本書では一貫して、異なる職種の人たちが「何を大切にしているのか」「どんな悩みを抱えているのか」を理解しようとする姿勢を、大切にしています。

部署が違えば、考え方や優先順位が異なるのは当然のこと。

だからこそ、その違いに気づき、歩み寄ろうとする姿勢こそが、全社的なデータ活用を前に進める最も重要な鍵になる。

私は、そう信じています。

本書の構成

本書の構成は、働く人々の心や仕事をポジティブに捉え直すという想いのもとに生まれました。参考にしたのは、私自身が深くリスペクトしている二冊の名著『島耕作シリーズ』（講談社）と『もしドラ（もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』（ダイヤモンド社）です。

本書は【基礎知識編】で一緒に学び、【実践活用編】で実際の現場を変えていく、そんな二部構成になっており、初めての方でも安心して読み進められます。

基礎知識編（第1章～第3章）では、データ活用の現状や課題、基本プロセス、そして本書の核となる「データカタロ

グ」について、基礎から丁寧に解説します。データに直接関わっていない方でも今のデータ活用の姿をしっかりと理解できるはずです。

実践活用編（第4章以降）では、ある企業を舞台に、主人公がデータカタログを活用して各部署の課題に挑み、会社全体の変革へとつなげていくストーリーが展開されます。経営企画室、データチーム、IT部門（情報システム部門）など、主人公がさまざまな職種の人たちと関わりながら、現場に根づいたデータの課題を一つひとつ解決していくプロセスを描いています。

ストーリー形式であることにより、あなたは自然と主人公に感情移入しながら、実務での活かし方をイメージできるはずです。楽しみながら、深い学びを得られる構成にしています。『もしドラ』のように理解し、『島耕作』のようにサクセスしましょう。

AIやDX戦略の、その前に。

生成AIは、今やビジネスの現場で最も注目されているキーワードの一つです。

しかし、AIが出す結果の精度や信頼性は、「どんなデータで学んだか」だけでなく、「**そのデータが正確で、意味づけされていて、誰もが探せて使える状態にあるかどうか**」にも大

きく左右されます。つまり、データが「管理」されているかどうかが重要になります。この背景は意外と知られていません。

これからの時代に本当に求められるのは、AIの派手さではなく、それを支える地に足のついた仕組みを理解し、現場で活用できる力です。

それは誰か特別な人の話ではありません。むしろ、**この本を読むあなたのような人にこそ発揮できる力です。**

データカタログは、生成AIのような派手さはないかもしれませんが、**しかし私は、日本企業が長年抱えてきた根深いデータ活用への課題を、着実に解決へと導く力を持つ、本質的な「仕組み」だと確信しています。**

その価値を理解し、実際に使いこなせたとき、あなたはきっと、組織に変化をもたらすリーダーになっているはずです。

難しそうに感じるかもしれませんが、最初の一步は、この本の中にあります。

それでは——データカタログの世界へ。一緒に飛び込んでみましょう。

本書で取り扱う 押さえておきたい重要ワード

職種 データエンジニア

データ分析に向けた準備（たとえるなら、収穫した食材の下処理）を担うエンジニア。データ基盤の構築や運用を担当し、近年その重要性が急速に高まっている職種である。

→第1章

職種 データスチュワード

社内データの安全性・品質を維持・改善する専門職。社員が安心してデータを活用できるように整備する役割を担うが、日本では人材が極端に不足しており、ほとんど存在しないのが現状である。

→第1章

職種 シチズンデータエンジニア・データサイエンティスト

エンジニア職ではないものの、事業部門やDX推進室などで働きながら、データ分析にも挑戦する人材。ビジネスの現場を深く理解していることから、データドリブン経営を実現するための「橋渡し役」となる、貴重なBRIDGE人材ともいわれる。

→第1章・第2章

製品 データカタログ

社内に点在するデータに、意味や説明（メタデータ）をつけて整理し、検索・可視化・活用できるようにする企業向けソフトウェア。社内のデータを「使える資産」へと変える。本書では、行政のオープンデータカタログとは異なり、企業内部での利活用を目的とした製品を指す。

→第1章

テクノロジー 機械学習・LLM (Large Language Models)

機械学習は、データからパターンを学び予測や分類を行う技術。その応用の一つが生成AI。LLM（大規模言語モデル）は生成AIの基盤として、自然言語や画像の生成を可能にする。

→第2章

製品 BI (Business Intelligence) ツール

データを可視化・分析し、意思決定を支援するソフトウェア。専門的な技術がなくても操作でき、現場の担当者でも自らデータを活用できる環境を提供する。ダッシュボードとも呼ばれ、代表例として『Tableau』『Power BI』『Looker Studio』などがある。

→第2章

製品 データベース (DB)

顧客情報や売上データなどを整理して保存し、あとからすぐに取り出せるようにするためのソフトウェア。データ分析専用のものは「データウェアハウス」と呼ばれる。

→第2章

製品 データウェアハウス (DWH)

会社の中のさまざまなシステムから集めたデータをまとめて整理し、分析しやすい形で保管するためのデータベース。分析のために特化して作られており、『Google BigQuery』『Snowflake』『Amazon Redshift』などが代表例である。

→第2章

技術 ETL・ELT (Extract/Transform/Load)

データを集めて、使いやすい形に整えて、まとめて保存するまでの一連の処理の流れ。この処理を自動で行うためのツールや仕組みが、データ活用の裏側を支えている。

→第2章

専門用語 データ基盤

会社の中にあるデータを集めて、整理・保存・分析しやすくするための仕組み。データウェアハウスやETLツール、BIツールなどを組み合わせて作られ、データを活用しやすくする土台として使われる。

→第2章

専門用語 データ資産 (データアセット)

会社が持っているたくさんのデータの中で、業務で活用可能な形に整えられた「価値のあるデータ」のこと。こうした状態にするには、集めて、整理して、見えるようにする仕組み(=データの整備)が必要である。

→第2章

専門用語 データソース／ローデータ

データソースはデータのもとになるシステムやサービス。ローデータはそこから得られた整理前の「生のデータ」である。分析には加工が必要になることが多い。データソースは「畑」、ローデータは「収穫したばかりの野菜」。食べる（分析する）には下ごしらえ（加工）が必要というイメージ。

→第2章

専門用語 データマート

部署や目的ごとに使いやすく加工されたデータ。たとえば「営業部門で使う売上データ」など、必要なものだけを取り出して、すぐに使える形にしたデータのかたまりである。

→第2章

データの専門用語 テーブル情報

データの中身や構造を説明する「データのカルテ」のようなものである。たとえば、「このデータにはどんな情報が含まれていて、どんな項目があるか」といったことが一覧でわかる。

→第3章

技術 SQL（エス・キュー・エル）

データベースに入っている情報を取り出したり、まとめたりするための操作専用の言語。アプリを開発するためのプログラミング言語とは異なり、ほしいデータを抽出したり、加工したりするのに使われる。

→第3章

技術 API (Application Programming Interface)

ソフトウェア同士が機能やデータをやり取りできるようにする「つなぎ口」である。分散されたデータをまとめたり、外部のサービスと自社システムをつないだりするときに使われる。

→第4章

ビジネス KPI (Key Performance Indicator)

目標の達成状況を数値で確認するための指標のこと。売上や顧客満足度など、部門をまたいで共通のものさしとして使われる。ダッシュボードなどでKPIを共有する際は、意味や計算方法をそろえておくことが大切である。

→第4章

専門用語 データリネージュ (Lineage)

そのデータがどこから来て、どう加工され、最終的にどこで使われたかをたどる仕組みのこと。家系図のように図で可視化されることが多く、トラブル時の調査や、データの信頼性を確保するのに役立つ。

→第4章

データの種類 構造データ／非構造データ

構造データは、売上表や顧客リストのように行と列で整理された「表形式」のデータで、Excelやデータベースで扱いやすいものである。一方、非構造データは、テキスト・画像・動画など、決まった形がないデータのことである。

→第6章

専門用語 データマネジメント・データガバナンス

データマネジメントは、社員みんなが使いやすいように、データを集めて整える仕組みである。データガバナンスは、データの安全性や正しい使い方を守るためのルールや体制を整えることである。

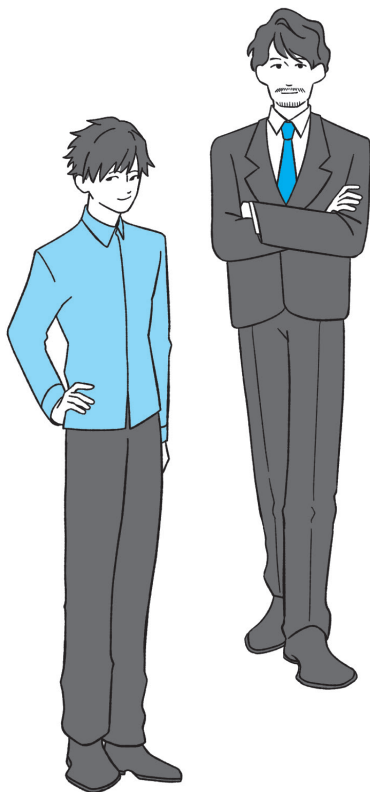
→第8章

専門用語 メタデータ (Metadata)

データそのものではなく、「そのデータが何か」を説明するための情報である。たとえば「この売上データは、〇〇部門でいつ取得されたのか」といった情報がそれにあたる。データカタログでは、このメタデータを整理して、データを使いやすくするために役立てる。

→第8章

主な登場人物紹介

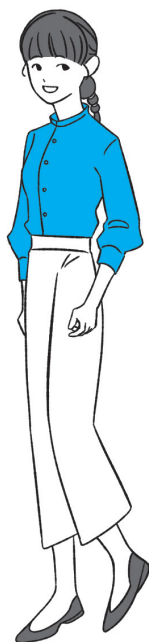


フカノ

データサイエンティスト。ノアの会社にてデータ活用コンサルタントとして参画している。ノアとともに各部署のデータ活用の悩みを解決するため奔走する。

アキモト

初芝五洋デジタルのDX推進室室長。いつも飄々とした態度でどこからともなく現れる。自社のデータ活用推進のために、ノアをDX推進室へスカウトした。



喜多ノア

本書の主人公。数値にこだわる営業力を買われ、アキモトにDX推進室へ誘われる。持ち前の明るさとコミュ力で、社内の各部署のお悩みをデータカタログで解決に導く。